あぶらむ通信

第29号　2007年12月　　あぶらむの会発行
〒509－4121　岐阜県高山市国府町宇津江3225－1
TEL 0577-72-4219　FAX 0577-72-4494
E-mail：abram@hidatakayama.ne.jp
URL http://www.kokkufu.net/～abram/

ソウルの街角で見つけた土人形

飛騨便り

2007年、昨年とはうって変わって雪のない年明けでした。こんな時に限って、沖縄からは雪を求めて40名もの「雪遊び訪問団」がありました。雪という雪を全部かき集めてソリコースをつくったり、雨乞いならぬ雪乞いの踊りをおどったりと、この地に来て20年、始めての事だらけの年明けとなりました。

あぶらむ通信お手の皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。今年も、この一年間のささやかな歩みをお届けできることを嬉しく思います。

●成人式を迎えたあぶらむ

1987年、あぶらむの会がこの地に産声をあげて20年となりました。「アッ」という間の20年でした。荒地だったこの土地に入植し、石や切り株を除去しながらの道づくりなどの開拓期。活動の拠点となるべく「宿」づくり等の施設建設期。数々の問題をかかえた現実に対して、試み的プログラムの展開期。そして今「人生の良き旅人づくり」というあぶらむの設立目的の中で、これから私たちが果たして行かなければならないことの輪郭が、より鮮明に見え始めてきたように思います。多くの人々に、「あなたの思うようにやってみなさい」といって励まされ、支えられてきた20年間でした。感謝をしてもしきれません。本当にありがとうございました。

人間でいえば成人式を迎えたあぶらむです。もっと祝いの行事をしてやりたかったのですが、個人的祝い事が先行してしまい、あぶらむまで手がまわらないといった一年でした。この地に来た時、まだ小学生だった４人の子どもたちが次々と結婚を宣言。一年に二人も結婚となれば親も大変なので、「合同結婚式」を提案したら、ひややかな反応。親として特別に何をする訳でもないのですが、どこか落ち着かず、あぶらむの成人式に専念することができませんでした。

のほほんとした東京生活から一転したここでの生活。真冬、氷点下10数度の中での除雪作業や通学。小さなからだを弓なりにして、重い生コンの入った一輪車を押した子供たち。８年間働いた立教大学の礼拝堂。ウェディング姿の娘と入堂した時、晩秋の冷たい雨の中、片道10kmの自転車通学の辛さで、家に着くなり泣き出した娘の姿を想い出し、一瞬胸が詰まりました。あぶらむ創設の20年は、そのまま私たち家族の20年でした。

●買った方が安いお米

現在、あぶらむが米作りしている田の面積は2反4畝、一反が300坪だから720坪、約2,400㎡、2.4アールである。この面積の田を現代的農機具の力を借りずに全て昔ながらの手作業でやるということは自分たちにとっては不可能である。これだけの規模の田を維持するのに、あぶらむが所有している農機具は、トラクター（田を耕す機械）、バインダー（稲を刈り束ねる機械）、ハーベスタ（脱穀機）、そして田植機はリース使用である。最低限、これだけの農業機械がないとできないのである。どれも新品で買えば数十万円～数百万円もするしろものばかり。あぶらむが買える農業機械といえばスクラップ（廃品）寸前のものばかり。自動車ならば毎日でも使えるが、農機具ばかりはどう頑張ってみても年に一度、たった一回きりしか使えない。そんなもののために予算を使う余裕など全くない。けれども機械がなければ

何一つできない現代。スクラップ寸前のものであろうが、機械にたよらざるを得ないのである。

9月25日、刈り入れ前夜、農機具の点検をしたら刈り取り結束機のバインダーのエンジンがかからない。どんな機械でもエンジンが始動しなければ話にならない。昨年、しまう前に点検整備をしたのにと私は不満たらたら。でもエンジンはかかってくれなかった。修理診断の結果、「電子スターター」の故障とのこと。部品交換で35,000円とのこと。3万円で買った機械に3.5万円の修理代。おまけにこの機械、消費税並みの未結束を生じるしろものである。刈り取るのが遅くても、しっかりと結束してなんぼという機械なのに5％ほどの未結束が出ては、その後始末が大変である。私は修理する気持ちにはなれなかった。そんな私の真理を見越してか、「このバインダー5年落ち。こんな上質な中古品そうは出ませんヨ。値段は18万円。新品ならば45万円ですヨ。」と売り込み農機具屋。「じゅうー・はち・まん・えん」、その瞬間「18万円でどれだけの米が買えるだろうか」と、私の頭はソロバンをはじいていた。かつては60kgあたり2万3千円ほどだった米の価格が、流通の一部自由化が始まった95年ごろから落ち続け、この秋は1万4千円台となった。今年のあぶらむの収穫量はヒエにもやられ、従来の収穫量1,200kgを大きく割り込み、750kgほどだった。もし、全部売って現金化しても18万円あまり。苗代、肥料代、田にかける一年間の労力、それら全てをひっくるめたものが、5年落ちの「刈り取り結束機」と同格なのである。稲作従事者の誰しもが、「米をつくっても農機具代の足しにもならん。機械の支払のためにやっているもんさ。」全く同感である。おまけに天日干しした稲の脱穀中に「ハーベスタ」（脱穀機）のエンジンがかからなくなってしまった。「故障」の宣告、またまた数十万円の出費か！？あぶらむの悩みは深まるばかりだった。

「米はつくるよりも買う方がはるかに安いのである！！」この「トリック（つくるよりも買う方が安い）」が日本という国をおかしくしているとしか思えないのです。

●少年たちの変容

そんな米づくりなんか、やめた方がいい。たしかに数字の上ではそういうことになる。「数字至上主義」の今日では、「改革」の名のもとに、あっさりと切られてしまうこと間違いなし。

家庭裁判所から「補導委託」であぶらむ預かりとなった少年、半年間の生活を終えもうすぐ家に帰れるという時だった。「家に帰れること嬉しいだろう」という私の野暮な質問に、彼は「帰りたい気持ち80％…」と答えた。残り20％はここにいたい気持ちという。その理由をたずねたら、「皆でおしゃべりしながら食事できるから。食事がおいしくて、楽しいから」という答えが返ってきた。少年は母親との二人暮らし。お母さんは一日に三つの仕事をしながら必死で生活を支えてきた。少年がもの心ついた時からここへ来るまで、いつも「一人食事」だったという。「家に帰れるのは嬉しいが、また一人食事が始まるかと思うと淋しい。」という少年の吐露に胸が詰まった。「食事の仕方」を見れば、その人の生活や人柄がよく見える。あぶらむへ来る少年達の食事の雑さ、きたなさ、「食堂にニワトリを飼おうか。」と私に云われるほど食べ方が雑である。食べ終わった茶碗にはごはんつぶだらけ。折り詰め弁当を食べる時、まずフタについたごはんつぶから食べるように躾けられた私にとっては、耐えられない光景である。

そんな少年達もいつの間にか、茶碗に一粒のご飯も残さずにきれいに食べるようになって

行く。彼等のここでの役割の一つに、農作業がある。今の季節であれば落葉を集め、堆肥として田畑に返す。無農薬のため虫取りや草取りなど、収穫までの山ほどの手間。食卓にのぼるまでにどれだけの労力が支払われているのか、少年達は身をもって知るのである。「ごはんはもっときれいに食べなさい」と、彼等は幾度となく云われてきたことと思う。しかし、実感のないところには言葉は心の深みにまでは届かない。

このように少年達の変容を直に見るにつけ、私たちの米づくりは「ゼニ、かね」の問題ではなくなってくる。そしてそれは、あぶらむだけが直面している問題ではなく、広く日本という国が直面している問題と思う。経済効率以外の価値基準をどのように持てるのか、つきつけられている問題は大きくて深い。

●再び沖縄へ

1968年、始めて沖縄のハンセン病療養所を訪ねてからもう40年になった。生きた現場（現実）から学ぶことの大切さを知った私は、その後も沖縄にかかわり続け、そしてフィリピン・韓国・ネパールと学びの場が広がっていった。

1996年に始まった「子供から大人までのネパールの旅」も、今年で11回目を数えた。今後は各年毎に催すことにした。参加人数延べ150人になった。多くの困難が伴う旅だったが無事故でよくも11年間も続いたものと、関係者及び大いなる見守りの源である神に感謝したい。

沖縄が多くの人々に注目され、関心を持たれるようになってからは、私はフィリピン・ネパールの方へより多くの関心を向けてきた。しかし、生きた場からの学びの大切さを教えられた沖縄との関わりから40年、そしてあぶらむの会創設20年の節目年、沖縄をもう一度若者との学びの場としようと思うようになってきた。若者育てのためにもう一度沖縄の胸を借りようと思っている。

冬、雪のあぶらむの里にやってくる沖縄の子供たち。限りなく透明な海と多くのいのちに溢れた沖縄の地で、自分の人生を考え求める本土の子供たち。やっと両方向プログラムが実現しそうだ。遅々とした私たちの歩みですが、見守って下さい。

そんな、こんなで2007年が過ぎ、新しい年を迎えようとしています。あぶらむの農機具はどれもエンジン停止状態ですが、私のエンジンは次のステージに向けて始動開始です。これまでの20年間はあぶらむの里という舞台づくり、これからはこの舞台を用いての「表現」です。2008年という新しい年、若者育ての序章曲がかなでられる年となるようにしたいと願っています。

それではどうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

2007年12月

あぶらむの会　代表　大　郷　　博

あんなこと そしてこんなこと

あんなこと（2007年の主な報告事項）

●家庭裁判所よりの少年補導委託

2004年９月、初めての少年を受け入れて丸３年がたちました。この間、６名の少年を受け入れ、うち５名が最終審判を終え、各々の家庭に帰っていきました。人生、山坂多かろうがまっすぐに歩んでいって欲しいと祈ります。

● ガヴィス奨学金

次年度も継続として、反町真理子さんが代表を務めるNGO「コーディレラ・グリーン・ネットワーク」を通して、フィリピンはカリンガ州立大学に学ぶ５名の学生に授業料を応援します。

メルチョー・カガーリン、リサ・クリス・バガイ、ジョジョ・リアガオ、ローナ・ボルウェイの４名から感謝の手紙が届きました。

● あぶらむ黙想会

念願だったあぶらむでの黙想会、幾人かの人から背中を押され、やっと実現の運びとなりました。初めての試みなのに21名もの参加者を得たことは大きな喜びでした。大郷の企画する黙想会では心配とばかり、ナザレ修女会から、のぶ修女が参加して下さいました。私としても大きな安心でした。参加者の一人からこんなお便りをいただきました。嬉しかったです。

先日の黙想会では、たくさんの貴重で新鮮な経験をさせて頂き、ありがとうございました。初めてのお祈り、毎食のおいしい食べ物、そしてあぶらむのスタッフの方々をはじめ、参加された素敵な人々との出会い。一言では言い尽くせませんが、黙想会を通して、真心と真剣さとお茶目のないまぜな雰囲気を存分に楽しんだ気がします。そして何か自分に不足しているものに気付き、また求めていたものに出会えた気がし、とても満たされました。

いつか、あぶらむでのこのような機会があれば、是非また参加したいと思います。

後回しとなってしまいましたが、あぶらむの会の個人会員への申し込みをお願いします。ホームページ上で、“入会のきっかけは??”との事なので…。黙想会において、本当のこと、大切なものを自身に問いかける機会を得て、何かを始めるには良い時かな、と思ったからです。

こんなこと（2008年の主な行動予定）

●沖縄キャンプinトガシキ島

○目　　的　沖縄の自然、風土、歴史との出会いを通して、子供たちに“感動”という心のふるえを伝えたい。

○場　　所　沖縄慶良間諸島渡嘉敷島　国立沖縄青年の家

○期　　間　2008年度３月27日～４月２日（予定）

○対象年齢　小・中学生及びプログラムへの関心者

○参 加 費　未定

●あぶらむ雪祭りと雪の猪伏山スノーシュー・トレッキング

○雪祭り　2月8日～11日　　○トレッキング　2月下旬～3月中旬

●あぶらむ自然学校

○期間　8月上旬の6泊7日

○対象年齢　小・中学生

●あぶらむ周辺の登山・トレッキング　大展望が楽しめる山之村の天蓋山（7月中旬）

あぶらむの里周辺には1,500mほどの眺望のよい山がたくさんあります。周囲の景色を楽しみながら、今年もゆっくり歩いてみたく思っています。

心に残った一文

世の中が妙だっていうけど　意味もなく妙じゃなく　妙になった瞬間がある

近頃の流行りは「妙」である。ミョーと表記し、発音した方が実感出来るかもしれない。次々と起こる事件の、原因と結果に納得がいかない。

過去にも悲惨な事件は数えきれないくらいにあったが、事情は呑み込めた。納得はしないまでも、そういうことか、しかしなあ、他の方法もあったろうに、という思い方も出来た。

しかし、ここ何年かはそうではない。これでは殺人事件の裁判でいうところの、動機と殺意の有無などもほとんど無意味になってしまう。動機がなくても犯行に及ぶし、殺意がなくても人は殺す。もはや動機と殺意が曖昧だからといって、罪を割引には出来ない状況になっているのだ。

人々は妙だミョーだと頭を抱え、その都度の対処法探しにキリキリ舞しているが、それでは方策は見つからない。妙はぼくらが作った。世の中のミョーは、小さい異変を見逃してきたことが積み重なって怪物化したものである。そもそもの小さい異変は大したことではなく、笑って済ませられる程度のことだった。でも、許してはいけなかった。許したためにいつの間にか寄り集まり、社会の価値観、人の美意識という背景を腐らせてしまったのだ。

たとえば、小さな異変が誕生した「時」というものがある。その時を点にしてクックッと社会の直線が曲がってきたのだ。思いつくままに、その「時」を並べてみる。

『３Kという格付けを無神経にした時』
『少女売春を援助交際と言い換え、売春と交際を同義語にしてしまった時』
『父親不要の家族常識を笑いながら作った時』
『“詫びたら負け”、何があっても、ごめんと先に言うなを生活の知恵にした時』
『“友だちのような関係”を善意っぽく美化した時』
『勤勉、真面目を、野暮、ダサイと笑いものにした時』
『死はリセットだと信じこませ、負けそうならとりあえず死ね、とゲームでその気にさせてしまった時』
『万引きを万引き程度、恐喝をカツアゲごときという風潮にしてしまった時』
『ホリエモンを世紀の英雄に祭り上げた時』
『弱い者いじめの図式を芸として確立させ、それを“お笑い”と認知した時』

ざっと頭に浮かんだものを書いただけでもこのくらいある。気がつかなかったが、その都度、これらの小異変で角度がついて曲がっていたのだ。

これらの一つ一つは、常識化してしまって、何らの危険を感じないというのが実情である。しかし、無抵抗に受け入れて、こんなものは単なる流行り廃れ、もしくは、今様ですよなんて思っていると、とんでもないところへ乱反射し、社会を歪め、人を傷つけ、子らを闇の迷い子にしてしまう因となるのである。

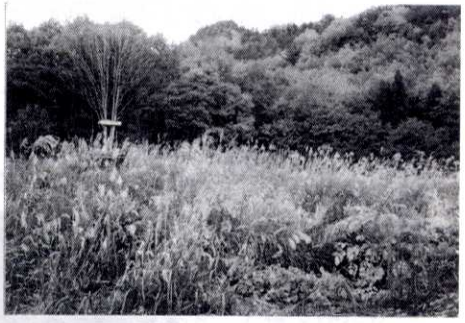
清らかな厭世ー言葉を失くした日本人へー
阿久　悠　著　　新潮社

写真で見る あぶらむ この20年

土地との出会い

1987年、初めてこの土地に出会った。
荒れ茫々の、ススキヶ原だった。

子供たちもまだ小さかった。



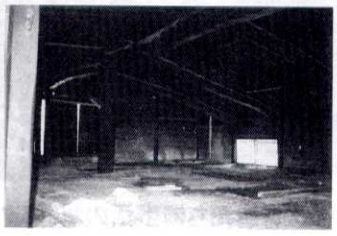
開拓期

道路づくりから全ての作業、手前で。
万人力のパワーシャベルのおかげで、
抜根作業や石の移動も楽になった。

みようみまねで初めて建てた道具小屋。
ここに寝泊まりすることもあった。
夜明けが待ち遠しかった。

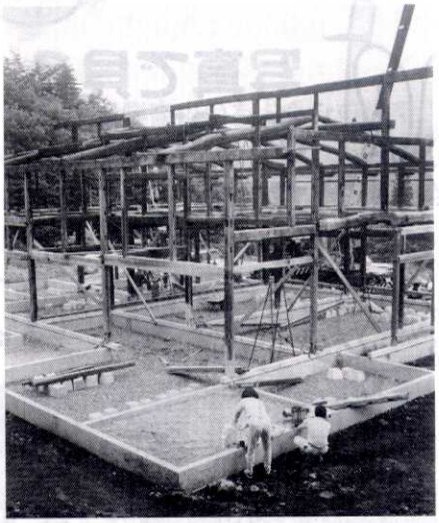
建設期

あぶらむの宿は古民家の
移築とした。
解体移築前の家。



右はその内部
（二階部分）

解体移築・建築中の宿



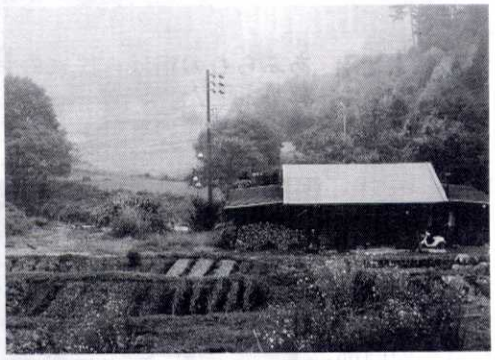
新しく仕上がった宿

宿外観

〈玄関〉

〈２階〉

1996年黙想の家「諸魂庵」完成。
荒れ茫々のススキヶ原だった土地も整備され、
作物ができるようになってきた。



若者たちの生活の場「スタッフ・ハウス」

アラスカ冬物語

2007年２月21日、北緯66度33分アークティク・サークル（北極圏入口）を越えること約100km、コールドフットの村は-41.6℃だった。1992年、星野道夫さんのお姉さん、三原京子さんから「弟の本を読んでやって下さい」と、「アラスカ風のような物語」をいただいた。星野道夫という人を知った最初だった。数々の写真もさることながら、透明感に満ちた文章に圧倒された。こんな文章を書く人に会ってみたい！！私の彼へのラブコールが始まった。1994年２月、彼はあぶらむの里を訪ねてくれた。飛騨古川駅に迎えに出ていた私、恋いこがれている人を待つ私とは対照的に、電車をおりてきた彼の顔は「姉が行けといったから来たけど、あぶらむって何なのよ」という怪訝な顔だった。２泊３日のあぶらむ滞在、私にとっては至福な時だった。「大郷さん、次はあなたがアラスカに来る番ですヨ」。1996年９月、私はアラスカに彼を訪ねるための準備をしていた。そんな矢先の８月８日、彼はカムチャッカで熊に襲われ、突然に一人旅立っていってしまった。

２泊３日のあぶらむ滞在の時、彼は厳冬期のアラスカのこと、いろいろと話してくれた。「撮影の旅から家に帰ると、一番暖かな場所は冷蔵庫の中。一番苦労するのはフィルムをまきあげる時、フィルムが凍ってしまってバリバリになっているから、ゆっくり少しずつまきあげないと切れてしまう。シャッターも15分もすれば凍ってしまっておりなくなってしまう」。彼の話、どれもこれも私の想像を超えるものばかりだった。

夏秋期のアラスカを３度ほど訪ねた私、厳冬期は未経験だった。一度はたずねてみたかった。彼がどのような環境の中で撮影していたのか、一度はこの身で体験したかった。あぶらむの会主催、「アラスカ・オーロラの旅」に参加した12名、アラスカ第２の街フェアバンクスから北へ約400km、北極圏の村コールドフットを目指した。フェアバンクス出発の朝は−36℃だった。最初に感じたのが煙のたなびき方だった。車の排気ガスも家庭から出る煙もどれも元気がなく、天高く上に登ることもなく、ヘナヘナとのぼったかと思えばすぐに地表におりてくるのである。「寒い日は煙に含まれている水分が凍ってしまい、煙は地面近くにたなびくのですヨ。アラスカでは寒くて学校が休校になるのではなく、凍結スモックによってなるのです。」と説明してくれたガイドの安藤さんの言葉が理解できるまでに、時間が必要だった。車を走らせていて不思議なことがいくつもおこった。厳冬期のアラスカでは自動車の単独行は厳禁である。故障してしまえばそれは即「死」を意味する。どの車にも精巧な温度計がついていた。気温がある線を越えると深刻な状況におちいるからである。アラスカはその面積からいえば道路はほんのわずかである。その分、自家用飛行機がおぎなっている。「ダルトン・ハイウェー」、北極海の海底油田基地に必要物資を運ぶためにつくられた道である。

北緯66度33分、これより北極圏。気温は−38℃だった。

走るのは、我々の車以外はほとんど大型の物資輸送車隊ばかりだった。そんな道を山を越え、谷をくだり400m近くを走った。不思議なことに山にむかって登って行くと気温が高くなっていった。逆にくだり道にさしかかるとみるみる気温が下がっていく。「なんだァー、これは」、頭が正常について行かない。我々の世界では山にむかえば気温は低くなり、平地に出れば高くなる。厳冬期のアラスカは逆だった。一定以上に低く冷やされた空気は重くなり下に沈むこと、そこまで頭がまわるまでにまた時間が必要だった。

北極海油田基地へ物資を運ぶ大型トラック。排気ガスの水分が凍結し煙が地上にたなびく。気温は−41℃だった。

アラスカ第一の大河、ユーコン川にさしかかった。河口から2,800kmほどの地点、なのに橋はこの一ヶ所だけという。このあとカナダ領に入り約4,000kmほどの大河。カナダ領に4つの橋、この大河にして計5つの橋しかないという。極北の大地の広大さを実感させられた。川は全面凍結、数メートル下に水が流れているという。私たちの目に入るものは凍結した世界しかなかった。全面凍結しても-40℃の世界になると車のスリップがないという。-10℃ほどの飛騨の冬でスリップに悩まされている私には、これもよく理解できない話であった。タイヤ・スリップがおこるということは、タイヤの摩擦熱で氷が溶け、タイヤと氷の間に薄い水の膜ができるからおこる現象であって、摩擦熱でも溶けない-40℃の世界にあってはスリップという現象がおこらないとのこと、どれもこれも理解できるまでに時間が必要なことばかりの連続だった。フェアバンクスを出発して8時間ほど、車は目的地コールドフット村に着いた。村といっても北極海海底油田に物資を運ぶドライバー達のためのドライブ・インだけ。「次のサーヴィス・ステーションまで250マイル（400km）」という標識がまたアラスカの広大さを教えてくれた。

「オーロラ見物」といっても楽なことではなかった。いつ、どこに出るかは全くわからない。（今回一番よく出た時間帯は午前2時から4時の間だった。）オーロラは360度の天空のどこにでるかわからない。家の中で出現を待てば天空の一部しか見張りできない。屋外となれば20～30分ほどもするとこの生身のからだが凍結しはじめ、からだの動きがぎこちなくなってくる。「アラスカでは毎冬、自宅の玄関ドアの取手に手をかけた状態で凍死している人がいるんですヨ。からだに異変を感じたときはもう手遅れ。だから厳冬期は20分間と時間を決めて行動するんです。特に他州、他国から移住してきた人がよくやられるんです。」と話してくれた星野道夫さんの言葉を想い出した。外気を直に呼吸

真冬の余興。髪に水をつけたら数秒でごらんのとおり。恐るべき−38℃。

すれば肺炎になってしまう。マフラーの覆面越しに呼吸するため、口や鼻の周辺は氷でバリバリになってしまう。まぶたが凍りついて目があかない。オーロラ見物も気楽なことではなく、いのちがけの重労働であった。そんなオーロラ見物だったが、一度天空にオーロラが舞い始めると一同狂喜乱舞、歓声奇声を発しながらとびまわった。気温が-40℃であることを忘れてしまっていた。そしてオーロラのクライマックス、ここ一番という時にカメラのシャッターを切ろうとしたら、シャッターは凍りついてしまっていて動かなかった。

私が個人的に厳しく思ったのは外での用足し作業だった。飛騨の地で日常的に身につけているものが、厳冬期のアラスカでどれだけ通用するものか試したかったので、アラスカ特製の防寒服をつけることはしなかった。暖かめパンツに股引、特製ダウンのズボン下にズボン、そして一番外にオーバーズボンと五重がさねのいでたちだった。いざ用を足そうという時、厚手の手袋をしたままでというわけにはいかない。手袋をはずしたその瞬間、指が棒のようになってしまう。その指で５つのトンネルをくぐりぬけなければならないので、その作業たるや困難きわまりないものだった。-40℃の世界はマンガのような世界だった。星野道夫さんの厳冬期の撮影旅行にもそんな困難がつきまとっていたと思う。しかし、彼の本にはそんな話は一つもでてこない。意図的に書かなかったのだろうか。我々のガイド役の安藤さんは愚痴をこぼしていた。「星野道夫が見たアラスカが見たい」という問い合わせが多くあるという。それもあの広大なアラスカを５泊６日とか一週間内でという注文。仕事だから仕方ないと案内すると、夏ならば蚊が多いとか冬ならば寒すぎるとか、星野道夫の本にはそんなこと一つも書かれていないと文句を言うという。我々の想像力欠如もそこまでくれば世界遺産ものである。しかし、私はそこまでではなかったが、やはり-40℃の世界は想像外だった。私たちの住む世界、日毎にバーチャル化してきた。映像でいろんなもの、世界を見、そして見た気持ちになっている。その見たような、体験したような錯覚が多くの問題を産み出している今日このごろである。-40℃の厳冬期のアラスカは、改めて実際に触れ体験してみることの大切さ、重要さを私に教えてくれた。

夜空に舞うオーロラ、外は−40℃だった。フェアバンクス郊外で。

最近思うことと、あぶらむプログラム
立教小学生の感想

２年前、「脳内汚染」という本を読み、大きな衝撃と共にある種の納得を得た。著者は京都医療少年院の医師であり、大学で哲学、転部して脳の専門医となった人である。そんな経歴にひかれて読んでみた。不登校児やひきこもり、また家庭裁判所からの補導委託で預かる少年達と直に接していて、山積していた疑問点が多々あった私に、本書は多くの気づきと納得を与えてくれた。

著者の主張を一言でいえば、「TVゲームは麻薬と同じである」ということである。以下、少し長くなるが著者の「脳内汚染からの脱出」、－ゲーム、ネット依存症－から引用してみたい。

覚醒剤の静脈注射にも匹敵。

ノーベル賞受賞者を輩出したことで知られるロンドンのインペリアル・カレッジとハンマースミス病院の研究者達は、PET（陽電子放射断層撮影）という測定装置を用い、テレビゲームをプレイすることにより脳の中で何が起きているのかを調べた。８人の男性ボランティアが、戦車を操縦するゲームを50分間行った。すると、脳内の線条体と呼ばれる部位でのドーパミン放出が、約２倍にも増えていたのである。これは一体、何を意味するのであろうか。

ドーパミンは、脳内の神経伝達物質の一つで、報酬系とよばれる仕組みを支えている。報酬系というのは、何かを努力して達成したときに、心の報酬を与える脳の仕組みで、たとえば、難しい問題を苦労して解いたときとか、サッカーのゴールを決めたときにも、「やった！」という思いと一緒に放出されるのである。達成したときだけでなく、もう少しで達成できそうだという期待の高まりと同時に、じわじわと放出が高まる。

特に線条体の側坐核と呼ばれる部位で、ドーパミンが放出されると、快感が生じる。性的なエクスタシーの状態においてもドーパミンの放出がおこり、それが性的な喜びの源泉ともなっている。人の脳は、そうした心地よい体験を記憶して、また同じ行動を繰り返すようになる。心地のいいことを、人はすぐ覚えるのである。つまり報酬系は、人が何かを学習する時、それを強化するシステムでもある。

勉強にしろ、スポーツにしろ、達成感を味わい、褒めて貰うと、人はその行為をまた意欲的にやろうとする。逆に、やっても達成できなかったり、貶されると、もう二度とやりたくなくなってしまう。心の報酬を司るシステムは、その意味で、意欲の源泉でもある。

ところが、コカインや覚醒剤といった麻薬は、薬理学的な作用により、直接的にドーパミンの放出を増やしてします。何も特別な努力をしなくても、薬物を鼻から吸い込んだり、静脈に注射するだけで、線条体にドーパミンが溢れるのである。その結果、現実的に努力することなく、激しい快感が得られてしまう。つまり、報酬系の短絡的満足を引き起こすのである。

ちなみに、同論文に引用されているデータによると、覚醒剤（アンフェタミン）（0.2mg／kg）

を静脈に注射した場合のドーパミン放出の増加は、約2.3倍と算出される。ゲームを50分間プレイすることによって生じたドーパミン放出の増加が、約2.0倍だということは、ゲームをプレイすることによって、覚醒剤を静脈注射したのにほぼ匹敵する状態が、脳の中で起きていたということである。

このような子ども達を取りまく現実の中で、我々ができることといえば「お米ができるまで」を丁寧にやるしかないと私は思っている。「飛騨便り」にも記したが、米はつくるよりも買う方が数倍安価なのが現実です。だからといってそれをお金で解決してしまえば、大切なものは何も見えなくなってしまうのです。私たちは「便利さ」の名のもとに、この大切なものを捨て去ってきたのです。すなわち、大切なものは日々の遅々たる営みという「プロセス（過程）」の中でしか身につけることができないのです。「便利さ」ということは、「始めと終わりの間をいかにはぶくか」、いわゆる「キセル社会」でしかないと思います。始めと終わりとのこの「間合い」の中にこそ、実は私たちの人間的成長に必要な学び、気づきがあるのです。私たちが「お米ができるまで」に固執しているのはその点にあるのです。

あぶらむにやってくるいろんな課題をかかえた子供たち、私はその食事の仕方に注目します。まず始めは、10人が10人まで、茶碗に無数のご飯つぶをつけたままで、ごちそうさまをしてしまいます。おかずもあちこちの皿に手をつけてのくいちらし状態です。しかし炎天下、田の草取りをしたり、畑の手入れ仕事などを経験すると、いつしか食べ方が変わってくるのです。「もっときれいに食べなさい」といわれなくても、お互い気がつくと茶碗に一粒も残すことなく、きれいに食べられているのです。人生に一番必要な「ありがとう」＝「いただきます」という言葉は、この「お米ができるまで」＝ものごとのプロセス（過程）に参与することにあることと、私は確信します。このプロセスをはぶいたところでは、私たちに気づき、学びそして感謝という大切なことがうばわれてしまうばかりではなく、「仮想現実」なるものが（TVゲームやネット等）、「麻薬」と同種類となるというところに、私は今日的課題を強く感じます。

「脳内汚染」という本との出会いは２年ほど前ですが、私は自分の動物的「カン」として、そのことの危険性をTVゲームの出だしたころより感じてしまいました。だから米は買う方が安いことはわかっていても、「お米ができるまで」にこだわってきました。「体験主義」といって一笑にふされようが、自分で一つ一つ体験し、それを「経験」として行くことの大切さに、私はこだわります。

そんなことを漠然と思い、考えていた私に、卒業生の一人が小学校５年生の体験学習プログラムをもってきてくれました。現場の小学校教師と飛騨の山で、半ば仙人暮らしのような生活をしている私との協同作業、思索が始まりました。子供たちの反応が気になるところです。以下、小学校5年生のいくつかの感想文をお伝えします。

「飛騨高山」

56C　6　金子　颯

ぼくは、グローバルの説明会でいろいろなコースの写真を見た時から

「ぼくは絶対飛騨高山あぶらむのコースにするぞ！」

と決めていました。なぜかと言うとぼくは自然や虫が大好きであぶらむには虫がたくさんいそうだったし、なにより一度ツリーハウスでねてみたかったからです。ただ一つナイトハイクがどうかなと心配でした。

そして行く日に近づくにつれてとってもワクワクしてきました。

いよいよその日が来ました。大きな荷物を持って

「あぶらむへゴー！」

みんなでバスに乗ってトランプをしたりおしゃべりをして５時間ぐらい過ごしました。そしてやっとあぶらむに着きました。あぶらむの土地はとっても広くて、そしてとまる宿もとっても広かったです。思いっきり走り回りました。その日の夜、あぶらむにすんでいる大郷先生というおじいさんのお話を聞きました。色々な楽しいお話を聞きました。大郷先生は、

「とってもいっぱいな人だな～と思ったけれどちょっとふしぎな感じもするな」

でもそこがいい。そしてごえもんという部屋にとまることになりました。

２日目です。朝７時に起きました。空気がとってもきれいでした。あぶらむのはじめての朝です。

今日のメインはピザ作りです。これも楽しみにしていました。みんなで粉を練りました。そして少しそのきじをおいて木工場で作品を作りました。自分の顔を葉や木やタネで作りました。よくできました。

ピザは、きじをのばしてぐをいっぱいのせて大きなかまどで焼きました。りっぱなかまどです。大郷先生が焼いてくれました。

そしてみんなでおなかいっぱいに食べました。最高においしかったです。

午後はまきわりです。まきわりをやるのは初めてです。大郷先生が教えてくれました。よくわれなかったけれど大郷先生がやってくれました。おのをあげて、「ピュー」とおのをおろして…

「パシン」

とまきがまっぷたつにわれます。大郷先生はすごいな～と思いました。

この日の夜、きもだめしに行きました。ぼくは仲のいい友達と行きました。と中、おはかもありました。おはかの所で鈴の音がしたり声がしました。ぼくは

「絶対先生だな」

と思ったけれど友達は走って行ってしまいました。２人になって歩いていたら木のうらに先生がいました。バレバレです。ゴールについて帰りました。そしてねました。

３日目は四十八竜の上流で川遊びをしました。がんばって魚をとりました。そしてお昼を食べました。そしてあぶらむで自由にしました。トカゲをとったり虫をつかまえたりしました。そして仮みんをしていよいよオーバーナイトハイクです。出発は夜の７時半です。

出発して山道をずーっと歩きました。３時間半かけて11キロ歩きました。いぶし山の山ちょうに着きました。満月も見えてホタルも見えました。満月にてらされた雲海も見ました。とっ

ても感動しました。休けいをして下りました。はじめは楽だったけれどあとから苦しくなったりねむくなったり大変でした。ティム先生に支えてもらい半分ねながら歩きました。ティム先生が支えてくれたので助かりました。ティム先生ありがとう！そしてみんなで声をかけ合ってやっとあぶらむに着きました。すごくうれしくてたまりませんでした。つかれてふらふらしたけど「やった～っ」て感じでした。着いたのは朝の６時でした。そして思いっきりねてからじゃがいもほりをしました。４日目の始まりです。ほったじゃがいもでカレーを作りました。飯合でご飯をたきました。そのカレーライスはとってもおいしかったです。

それからあぶらむの大かくれんぼをやりました。先生達がおにでした。ぼくは友達とショベルカーの中にいたら犬をつれた大郷先生にみつかりました。みつかったので次はおにです。けっこういっぱいの人を見つけたけれど全員はみつけられなかったです。すごく楽しかったな。この日の夜はまちにまったツリーハウスです。ツリーハウスでみんなでしゃべったり笑ったりして楽しく過ごしました。木のかおりもいいし、やっぱツリーハウスはいいな。

５日目は高山市を見学しておみやげを買いました。おまんじゅうや赤かぶを買いました。高山市にある300年前にできたというじんやを見学しました。あぶらむの宿も300年前に作られていました。すごいなと思いました。

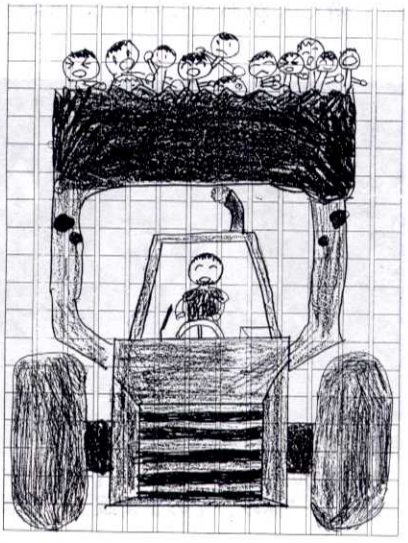
午後宮川という川でいかだ下りをやりました。最初は練習で大きなゴムのうき輪でやりました。流れはけっこう早かったです。そして大きなゴムのいかだですいすい進みました。とってもおもしろかったです。

つかれをとるために四十八滝温泉へ行きました。ろてんぶろもあるし最高です。そこで休んであぶらむでバーベキューをやりました。お肉にソーセージに野菜にいかにたくさん食べました。そしてキャンプファイヤーをやりました。A・B・Cと先生のだしものはとっても楽しかったです。

もう明日帰ります。すごく残念。あぶらむはとってもいい所です。自然がたくさんあります。そして楽しいいろいろなプログラムもあるし、本当に楽しい所だな。

６日目、あぶらむの最後のごはんを食べて、あぶらむとお別れしました。すんごーく楽しかったな。

ぼくは、あぶらむを選んで本当によかったです。あぶらむでやったこと見た物大郷先生やスタッフのみな様、全部大切な思い出です。



あぶらむから帰って来て、東京には自然が少なくてすごく残念な気持ちになりました。家の近くには、スーパーやコンビニがたくさんあってそれは便利だけど、小さいころから虫や自然が大好きなぼくは、あぶらむみたいな自然な所に住んでみるのもいいかなと思いました。

自然があって、仲間がいることが大切だとわかりました。最高なグローバルでした。

大郷先生とスタッフと、つれて行ってくれた先生ありがとうございました。

「オーバーナイトハイク」

5年C組　33　古川　歩

平成19年７月29日の夜、グローバルエクスカーションで行った飛騨高山のあぶらむの里で、ぼくは６人の友達と一緒にオーバイナイトハイクでいぶし山に登りました。

オーバーナイトハイクというのは、てつ夜でいぶし山まで26キロメートル歩くハイキングです。出発する前、ぼくたちは学校のクラスと同じA組、B組、C組の三つのグループに分かれました。A組の引率はあぶらむの里の大久保さんという男の人、B組の引率は遠山先生、C組の引率は西村先生でした。ぼくはもちろんC組でした。夜７時ぐらいから、A組、C組、B組の順番で、いぶし山に向けて出発しました。

天気は夜なのでよくわからなかったけれど、月が出ていて、暗いけれど周りはよく見えました。出発した時は、まだあたたかかったけれど、

「いぶし山は寒いからあたたかいかっこうをして行きなさい。」

と先生たちに言われたので、ぼくは長そで長ズボンの上にレインコートを着て、水とうを入れたリュックをしょいました。月が出ているので、かい中電灯はリュックに入れました。夜中にみんなと外を歩いたりしたことはなかったので、ぼくは出発のとき、ワクワクした気持ちでした。

出発してからは、しばらく道路を歩きました。先生も友達も、みんなで横に広がって歩いていました。歩いているうちに、だんだんと山道になってきました。山道は登りがけっこうきつかったけれど、

「くまが出そうだ。」

などと、みんなと言い合いながら楽しく歩きました。と中、A組やB組に追いついたりぬかされたりしながら、頂上に向かってがんばって歩きました。頂上がどんなところなのか、楽しみでした。いぶし山の頂上に近づくと寒くなって来ました。だんだんつかれて来たので、みんなあまりしゃべらなくなっていました。

夜中の12時ぐらいに頂上に着きました。頂上はすごく広かったです。神社のようなものに続く階だんがあったけれど、ぼくはつかれてしまって上がれなかったのが残念でした。頂上

26.5kmのオーバー・ナイト・ハイク。
路上で一休み、そのまま眠ってしまう子も。

小麦粉がピザに。自分でつくることによって、食への関心もちがってくる。石窯で焼くピザはとにかくうまい！

から周りを見ると、今まで歩いて来た道や、飛騨高山の町の明かりが下の方に見えて、
「とても高いんだなぁ。」
と思って達成感を感じました。頂上で20分ぐらいして、先生たちからもらったチョコレートを食べたり、パンを食べたりしました。なぜかすごくおいしく感じました。

休けいが終わってから、今度はちがう道を通って山を下りました。下りの道は意地悪みたいにすごく長くて、地ごくのように大変でした。あぶらむの里に早く着いてねむりたいのに、ずっと道が続いていらいらしてしまいました。下りの中でとちゅう休けいしたときは、山道の道ばたの石がごろごろしているところで、ねごこ地は悪かったけれど、リュックをまくらにしてねむってしまいました。下りていると中で、雨がふり始めたので、折りたたみのかさをさして歩きました。山を下りてからは、古い家が何けんかあったので、そのそばを通るときは静かにしました。最後の方はとてもつかれて、だまって歩きました。

たく山歩いて空が少し明るくなったころ、あぶらむの里にとう着しました！宿についてからは、ただただねむりたいということしか考えていませんでした。お茶を飲んで昼の12時までぐっすりねむりました。起きたとき昨日オーバーナイトハイクでいぶし山の頂上に登って、今日帰ってきたような、変な感じがしました。

オーバーナイトハイクは、ぼくがグローバルエクスカーションで飛騨高山のコースを選んだ一つの理由です。ぼくは行く前は、オーバーナイトハイクはもっと、ブラックホールにいるみたいに真っ暗なのかと思っていたけれど、じっさいは月が明るかったです。月がそんなに明るいということは、今までまったく知りませんでした。これはあぶらむの里に行かなかったら、わからないことだったと思います。夜中にねむいのに山を下りるのは大変だったけれど、今考えるととても楽しい思い出になりました。

ぼくは、同じ日本なのに、飛騨高山は都会とは、ぜんぜんちがうんだなぁーと思いました。家の数は少ないし、都会とはちがって不便です。冬に雪がふったらもっと大変だと思います。これがいなかというのかと思いました。でも自然にいっぱい囲まれています。都会は人がいっぱいいてにぎやかです。オーバーナイトハイクだけではなくて、川下りやピザ作りなど飛騨高山では都会ではできないことがたく山できて楽しかったです。また時々は、飛騨高山のあぶらむの里のようなところに行って、自然と遊びたいなぁと思います。

楽しさが溢れる後姿。子どもはこうでなくちゃ。

エアー・マットのいかだ。夏は水遊びが一番。
川と親しむことによって自然への関心が高まる。

アメリカよりあぶらむへ
―From America with Love―

小川　智子

あぶらむで１年半、スタッフとしてよく働き、家庭裁判所から補導委託で預かった少年たちを面倒みてくれた彼女が、アメリカ、アイオア州立大学の大学院に学ぶため、あぶらむを離れました。学業を終えた後、またあぶらむにもどってきたいといってくれています。そうなれば嬉しいですね。アメリカに行って感じた、あぶらむ発見記です。

「アメリカに行ったらお蕎麦もお寿司もたべられなくなっちゃうよ～。ともちゃん、それでもいいの？」という大郷さんの言葉に心揺さぶられ、皆さんとのしばしのお別れに後ろ髪を引かれながら日本を後にし、とうもろこし畑、大豆畑が果てしなく続く大地にやってきてもう２ヶ月以上が経ちました。

「食と農業を勉強するのになんでアメリカに行くの？！」と大郷さんに問われたとき、まったくもっともな意見だと思いつつ、それでもどうしてももう一度アメリカで勉強する夢を叶えたく、あぶらむの１年４カ月の暮らしに涙、涙でお別れしたのがついこの前のような、ずっと昔のような、不思議な感じです。カメムシを見てはあぶらむを想い、犬を見ては（犬種も関係なく）ぶぶ（あぶらむの犬）の香りまで懐かしくなり、かぼちゃを見ては育さんの煮物が恋しくなる、といった具合に、あぶらむが頭から離れることはありません。

現在、私はアイオワ州立大学で、どのように農業の形が変わってきたのか、農業の変化が食にどのような影響を与えてきたのか、現在の農業を変えられるならば、どの形を模索すべきかなど、とにかく食と農業にかかわることを片端から勉強しています。今回は学生であると同時に教授のアシスタントもしています。地方問題に関する社会学部のクラスのディスカッション部分の担当で、大部分がアイオワ出身の大学生たちと、貧困、移民、農業政策、バイオエタノールのもたらす影響など、アメリカの地方部に深くかかわるテーマについて勉強しています。なぜ日本人の私がアメリカの地方問題をアメリカ人の学生に教えているんだろう、と不思議に思うこともありますが、今のところ自分が取っている授業と同じくらい（時にはそれ以上）教えることを楽しんでいます。

さて同じプログラムの大学院生と将来の夢を話していると、「できればどこかに土地を見つけ、農業をしながら、ワークショップをしたり、自給自足に近い形のコミュニティを作りたい。そして都市部の子供たちを受け入れて…」といったコメントをよく聞きます。そのたび、私はまさにあぶらむのアメリカ版！と思い、あぶらむの話をしたくなります。みんなあぶらむの話には興味津々。こちらに来て、いかにあぶらむのような場

あぶらむの畑でとれた大豆で味噌をつくる智ちゃん。

所が世界中で必要とされているのか、つくづく感じている次第です。大学卒業後、私は約3年半東京の翻訳会社で仕事をしていました。その間ずっとアメリカ行きは考えていたのですが、アメリカで食と農業を勉強する前に、日本の他の県で生活してみたい、農業を近くで見てみたいと思い、不思議な縁のあったあぶらむで働かせていただきました。そして今アメリカで勉強する上で、あぶらむでの1年4ヵ月がとても意味深いものであったと感じています。

私が教えているアメリカの学生も、日本の若者と同様食から離れています。広大な農地に囲まれて育った学生も、現在の大規模農業がもたらす影響や、家畜の扱いなどのさまざまな問題について意識のない生徒が多く、食べ物は土からではなくスーパーマーケットから、といった感覚が現実です。牛肉や鶏肉を食べても、スーパーのパックになる以前の、生きている動物には結びつきません。私もあぶらむで暮らすまではそうでした。真冬にトマトやナスを食べても違和感はなかったですし、どのお米を食べてもそれほど味の差を感じませんでした。ところがあぶらむの生活を経て東京に戻った時に、野菜やお米の味があまりに違うことにショックを受けたことははっきりと覚えています。

あぶらむは地元の方々、全国・世界各地から集まる皆さん、韓国から来ていた徐さん一家との交流だけでなく、会社員時代にはほとんどかかわりがなかった十代の少年たちと生活を共にする機会も与えられました。彼らと共有した時間はすべてが大切な思い出ですが、一番はやはり毎日の食事です。少年達を送りだすときにいつも送別会をするのですが、そのたびに彼らは口を揃えて、あぶらむでみんなで食事をしたことが一番の思い出だったと言っていました。食卓を囲んで、会話と食べ物を共有するという大切なことを毎日当たり前に行っているあぶらむは、離れてみて改めてすごいな、と感じます。あぶらむの食事は、それまでの少年たちの食生活とは大きく違ったと思いますし、田んぼや畑での仕事、しいたけやなめこの植菌、味噌作りなど、食べ物の生産のプロセスにかかわることは、私にとって大きな学びであったとともに、少年たちにとっても意味深いことだったと思います。

大好きなぶぶ（犬）と一緒に猪伏山まで
スノーシュー・ハイキング。

今年5月までいたM君とは一緒に田植えを経験しました。田植えの1週間後、彼を送りがてら自転車で富山へ行ったときのこと、実りの時季を迎えた麦を見てM君は、「なんでここの田んぼはもう米ができてるんだよ！ともさん、これ米？！」ととてもびっくりしていました。富山に行く前には「富山に田んぼはほとんどない」と言っていた彼でしたが、富山市内に入っていくつもの田んぼを一緒に見て、ここの植え方、米の成長具合はどうだ、ああだと話し、麦を見て驚く彼を見て、なんだかとても嬉しくなりました。米の産地に行ったとしても、田んぼを語る16歳は中々いないのではないでしょうか。また多くの人は、作物としての米や麦の違いについて把握もなく、麦の収穫時期は把握していないのではないでしょうか。農業が行われている地域、行われていない地域のどこに住んでいたとしても、直接かかわりがないと見えない物は沢山あります。常に食べ物を口にできるという恵まれた環境にいなが

ら、日本人もアメリカ人も食べ物についてあまり意識・知識がないのが実情です。M君のエピソードのようなあぶらむの話は私の授業でも使わせてもらっており、教えている学生にするとみんなとても興味深く聞いてくれます。

あぶらむの里には、畑、田んぼだけでなく、山にもおいしい物がたくさんあります。昨年の今頃は、みんなできのこ図鑑を調べ、若干の緊張感とともに味わった“しめじ”ご飯に感動していました。里の恵みに関しては、ぶぶ（犬）も立派な先生です。本を見たわけでも、誰に教わったわけでもなく、よもぎ、ぜんまい、コンフリーなど、栄養たっぷりの山菜を散歩途中に夢中で食べているぶぶを見てよく感動したものです。私たちはどうしても人間のものさしで計算したり、善悪を判断したがりますが、自然に教わるというほかの動物たちが普通に行っていることを忘れています。自然の恵みから学ぶあぶらむの姿勢は、自然学校や夏季キャンプに来る子供たち、さまざまな問題を抱えてやってくる少年達だけでなく、宿に集まる大人の皆さん、そして私のようなスタッフにも多くを教えてくれるはずです。

現在は、どこに行っても皆スペシャリストを目指す傾向があります。大学院で勉強している私が言うのもおかしな話ですが、スペシャリストを目指す前に、生活していく上での知識をもっと重視しなければなとつくづく思います。畑や田んぼの手入れ、まきの準備、排水溝や下水の掃除、あぶらむの仕事は私たちが生活する上で必要なこと、当たり前にとらえていることを改めて教えてくれました。会社員時代には、私たちが生活していくためにどのような基盤が必要なのか、エネルギー、水、食べ物など、すべてにおいて東京がどれだけ他県に依存しているのか、何も知ろうともせずに暮らしていました。電気はスイッチを押せばつくもの、食べ物はどの季節でもスーパーで手に入るものに過ぎませんでした。日本が消費しているエネルギーの約４％しか自国で供給できないこと、食の60％以上を外国からの輸入に頼っていること、ましてや下水処理、その他、生活の基本については何も知らずに暮らすことには多くの危険がはらんでいます。あぶらむはそのような基本を問いかけてくれる貴重な場所です。

私は大学時代の４年半をアメリカで過ごしました。卒業後日本に戻った時のカルチャーショックは最初にアメリカへ来たときよりもひどく、東京での会社員時代はアメリカに戻ることばかり考えて暮らしていました。あぶらむの里での１年４ヵ月は、逃げ道としてではなく、新たな気持ちで再びアメリカに来る自信を与えてくれました。私があぶらむを知るきっかけを与えてくれた小学校以来の友達と彼女のお父さん、そしてあぶらむの皆さんとあぶらむを支えている数多くの方々に感謝の気持ちで一杯です。今学生として、教える立場として学んでいることを、いつの日かあぶらむの学校で活かすことができればなと思いながら、今日もアイオワで自転車をこいでいます。

E-メールアドレス変更のお知らせ

高山市との町村合併にともない、従来使用してきた国府町ケーブル・ネットが廃止となり、新たに「ヒダ・タカヤマ」に編入となりました。
それに伴いE-メールアドレス、あぶらむホームページのアドレスも変わりましたのでご案内いたします。

E-メール　abram@hidatakayama.ne.jp

2007年　あぶらむこの一年

1月・沖縄より40名の「雪遊び訪問団」。なのに積雪ゼロ。初めて雪乞いの儀式をする。
　沖縄の子供たちと山の神に裸踊りをささげたら、とたんに雪がふり出した。
　（1月6日～8日）
2月・南山大学人間関係学科ゼミ合宿
　・韓国メソジスト教会徐牧師一家帰国
　・沖縄訪問団第2陣（16名）。周囲から雪をかき集めて、どうにかしのぐ。
　・あぶらむ主催「厳冬期のアラスカの旅」
3月・今年も春を迎えることの喜び「春一番の会」
　・第11回「子どもから大人までのネパールの旅」（参加者11名）
4月・ＪＡ岐阜厚生連看護専門学校新入生オリエンテーション・キャンプ
　・第14回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋－金沢250km）参加者94名
5月・田植え（19日）
　・沖縄より「田植え体験訪問団」（18～20日　参加者11名）
　・津軽三味線二代目高橋竹山コンサート
6月・ゲシュタルト・セラピー研修会
7月・岐阜「生と死を考える会」研修会
　・立教小学校「自然の中でおもいっきりキャンプ」（5泊6日　参加者23名）
8月・あぶらむ自然学校（6泊7日　参加者19名）
　・南山大学人間関係学科ゼミ合宿
　・立教大学生フィリピン・キャンプ合宿
9月・第1回あぶらむ黙想会（3泊4日　参加者21名）
　・稲刈り（26～27日）
　・高山日赤病院研修医研修
10月・7日脱穀。収穫量例年の3割減
11月・逝去者記念式
　・「海と山との出会い」、富山「寿司栄」　坂本吉弘さんと共に
　・味噌用大豆、えごま、白菜、大根等冬用野菜収穫
12月・沖縄訪問（キャンプ地渡嘉敷島下見、愛楽園訪問）
　・越冬準備開始
　・あぶらむ通信発送
　・あぶらむクリスマス会

どうぞよいクリスマスを、そしてよいお年をお迎え下さい。

寄付者一覧（'06年11月13日～'07年11月19日）

石神耕太郎／近藤真紀／鈴木脩平／神田健次／坂本吉弘／宮城正男・正子／小川智子／津ヤコブ教会／芹田フミ子／下田英一／萩尾出穂／前田晃伸・容子／太田亟慈／梅沢雪子／北山和民／日野忠市／富永隆史・敦子／星野一朗／佃寿子／長野純吉／三沢悠子／谷市三／竹田純郎／坂口和信／木ノ内伸子／長谷川牧子／長谷幸雄／笹岡節雄／須間栄津子／松戸聖パウロ教会出張バザー／森田トミ／長谷川秀司／市川聖マリヤ教会／山田日出夫／伊藤法子／上田敏明／岸井孝司／高瀬留美／市川秀一／根本四郎／中村芳枝／串間千秋／静岡聖ペテロ教会／小林武／渡辺直明／藤田宏之／高濱友理江／工藤真喜子／池崎純一／島袋洋子／星野直子／高橋恵太朗／谷章子／倉石昇／福岡女学院中学校高等学校宗教部／小林賢三・佳子／松村昭子／砂川貴代／松戸聖パウロ教会／八代洋子／宮古聖ヤコブ教会／横浜聖クリストファー教会／松本昌子／又吉亀次／杉浦進／窪寺俊之／湊治郎／ジーン・レーマン／岡田賛三／祈りの家教会／松岡和夫／入野豊／杉山敏子／三原エイ／鵜川雅行／森毅／矢部直美／菅野和子／森本光生／片桐多恵子／神田キリスト教会／沢田京子／今関公雄／静谷英夫／大槻カズ子／土師晴子／松尾正枝／中野えり子／京野和子／江田宣子／東京聖テモテ教会奉仕会／松居勲／浜中好美／森紀旦・敦子／河野正司・マリ子／下堂前英一／斉藤由美子／伊藤文雄／相川喜久枝／菅原美穂子／松平信久／鈴木育三／長尾文雄／㈲清水自動車整備工場／金子美弥子／島田信弥／鈴木武次／江口富子／佐藤明子／池田秀直／坂尾新一／畑井正春／久田広子／野崎久子／石原つや子／本田りん／安藤実・陽子／小泉恵子／東祐子／鈴木茂男／橋岡加都子／鈴木康仁／松田あさみ／大保木正博／俵里英子／財満研三郎・由美子／矢崎ふき子／倉持昌弘／中島努

新規会員（'06年11月26日～'07年11月19日）

笠原雅子／日根野慶一／石崎東人・奈生美／山田裕章／永田綾子／小川智子／渡辺信子

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。